

先生としての教育とは  
ーフィンランドで考える(2)ー

開倫塾

塾長 林 明夫

Q:「フィンランドで考える」は、第1回目につき、今回で2回目ですね。

A:(林明夫。以下略)はい。第1回では、ヘルシンキ大学とフィンランド文部省国家教育委員会の主催で、昨年3月14日から16日までの日程で開催された「OECD-PISA調査で見るフィンランド、その成果と背後にある原因」という国際会議に参加した折の報告をさせていただきました。実は、その会議の3日後に同じヘルシンキ大学で2日間の日程で開催された「大学教育」に関する国際会議にも参加しましたので、今回は双方の会議を踏まえた上でのフィンランドの大学での教員養成について報告させていただきます。

私は、「教育成果」は「本人の自覚」と「先生の力量」によって決定されるものと考えています。それゆえ、「先生の力量」をどう「教育するか」に大きな関心がありましたので、「大学教育」に関する国際会議にも参加したわけです。

Q:PISA調査で、15歳の学力が世界一となったフィンランドの先生としての教育の特長を教えてください。

A:フィンランドの「先生としての教育(Teacher Education ティーチャー・エデュケーション)」の特長の第1は、入学者の選抜が厳しいということです。フィンランドの将来を担う国民の教育を背負う先生として適切か否か、つまり高度な学力、コミュニケーション能力、モチベーションの有無を審査するために、筆記、面接、ディスカッションの試験が課されます。その結果を踏まえて、最も先生としてふさわしい志望者を、大学における先生としての教育の対象にしているのがフィンランドのようです。

日本のように、希望すればほとんど誰もが教職課程を履修できるものではありません。

Q:大学の教員養成課程における学生選抜が厳格を極めると、優秀な人は「先生としての教育」を希望しなくなるのではないですか。

A:フィンランドでは、保護者も子供たちも、さらに言えば国民が先生を信頼し尊敬しているので、たとえ余りよい待遇とは言えなくても優秀な人が先生を希望します。したがって、能力とモチベーションの高い人を選抜することができるようです。

**Q：他にも先生としての教育の特色はありますか。**

A：日本で言う教育課程(フィンランドでは、「ナショナル・コア・カリキュラム」といいます)にかなり沿った大学3年間の「学部教育」が行われた後に、大学院修士課程で、小学校のクラス担任(クラスルーム・ティーチャー)や専門科目の先生(サブジェクト・ティーチャー)として教える上で実際に役に立つ理論や実務を教育されていることが、第2の特色です。

フィンランドでは、大学院修士課程を修了していないと先生の資格が与えられませんから、多くの先生志望の学生は、学部で3年、大学院修士課程で2年と合計5年間、専門職である先生としての理論と実務を学んでいます。

その内容はすべて、「ナショナル・コア・カリキュラム」に沿っていますので、日本のように学校に勤務するようになってから初めて教科書や指導書に手を触れるということはないようです。

**Q：校長先生としての教育にも特長があるようですね。**

A：はい。フィンランドでは、校長を希望する先生は仕事を持ちながら大学院博士課程に進学しますので、ほとんどの校長が博士課程を修了しているようです。

フィンランドで独自の教育哲学や教育理念に基づいた教育が徹底されているのは、校長先生の力量だと私は考えます。

**Q：学習塾、予備校、私立学校を経営なさっている皆様にとって、フィンランドの「先生の教育」システムは参考になりますか。**

A：大いになります。先生としてどのような人材を採用するのか、先生としての研修制度をどのように制度設計するのか、教室長や校長をどのように育成するのかが、皆様の最大の関心ごとであると考えます。生徒はもちろんのこと、先生としての教育カリキュラムをどのように組むのかを考える上でも、これからも是非皆様とともにフィンランドの教育を学び続けたいと思います。

**Q：林さんは、今年もフィンランドに行く予定がありますか。**

A：はい。5月21日から24日まで、「第2回世界カリキュラム研究会」がムーミン博物館のあるタンペレ市で開催されますので、それに参加の予定です。よろしければ、皆様もご参加なさいませんか。